吾妻地域における城構造と改修

― 大戸手子丸城・岩下城・長野原城 ―

飯　森　康　広

（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

はじめに
1．縄張と登坂土塁
2．大戸手子丸城
3．岩下城
4．長野原城
5．考察
おわりに

―― 要　旨 ――

本稿では、登坂土塁を古様な築城技術と位置付け、縄張分析から大戸手子丸城・岩下城・長野原城の３城について、それぞれの改修を検討した。登坂土塁は、吾妻地域特有の構成要素ではないが、半円形や三日月形の腰郭との組み合わせを地域色と考えた。改修には程度の違いがあり、戦国大名が係わったと考えられるケースであっても、必要によって投下される労働力に質の違いがあり、採用される築城技術にも違いがあるものと結論づけた。岩下城の改修は弱点を補う程度であったとみられる。大戸手子丸城の改修は、熟練した築城技術を見ることができるが、特に優れた技術レベルとは見なせなかった。長野原城の大手周辺の縄張は、二重竪堀と枡形虎口を結びつけた高度な技術を投下して構築された事例である。長野原城は、これまで関係文献が少なく取り上げられることも少なかったが、縄張分析を行った成果により、拠点城郭と位置付け、あわせて武田氏や真田氏が改修に関与した戦国大名系城郭と結論づけた。

キーワード
対象時代　戦国時代
対象地域　群馬県吾妻地域
研究対象　大戸手子丸城・岩下城・長野原城・登坂土塁・戦国大名系城郭

はじめに

吾妻地域は群馬県北西部に位置し、北から西にかけて新潟県・長野県と境を接し、範囲の過半は山地が占める。中央部を東西方向に流れる吾妻川は、長野県境の鳥居峠に源を発し、渓谷を形成している。鳥居峠を越えた信濃国(長野県)との交流は盛んであり、この地域の在地領主は信濃滋野一族の系譜を引く氏族が多い。本稿で検討する大戸手子丸城(東吾妻町)や長野原城(長野原町)に係わる大戸浦野氏、羽尾氏、湯本氏、鎌原氏は、こうした一族である。一方、岩下城(東吾妻町)を拠点として岩下領を形成していた斎藤氏は藤原姓であり、この地域の根底にはこうした氏族間の対立が潜在している可能性がある。

吾妻地域は吾妻渓谷を境として、便宜上東西に分けることができる。西吾妻地域は羽尾領が存在していたが、鎌原氏と羽尾氏との争いを契機として、武田氏の吾妻地域侵攻を招き、羽尾氏は滅亡した。また、東吾妻地域では斎藤氏の岩下城が、武田氏の侵攻により永禄７年(1564)までに攻略される。これを契機に武田氏による吾妻地域支配が始まり、あわせて岩櫃城(東吾妻町)が武田氏の拠点城郭化していく。

吾妻地域の拠点城郭は、羽尾領の羽根尾城(長野原町)、鎌原氏の鎌原城(嬬恋村)、大戸浦野氏の大戸手子丸城、斎藤氏の岩下城、武田氏の岩櫃城があり、他に明確な城主は不明ながら、長野原城、三島根小屋城・柳沢城・羽田城(すべて東吾妻町)、仙蔵城(中之条町)等が知られる。本稿で取り上げる大戸手子丸城・岩下城は国衆の拠点城郭であり、長野原城も同様と推測できる。これら３城は拠点であるが故に、外来勢力に攻略され、改修されたものと考えられる。各城の構造にはそれぞれの経緯があり、一様に考えることは難しい。現在残っている遺構は、最終段階の形態を示しており、複数の改修を経ている可能性が高い。このため、各城に重層する改修の痕跡を読み解いていくことで、歴史的な出来事と結びつけられる。その作業は困難ではあるものの、地域の歴史像の一側面をうかがえるものではないかと考える。

本稿では、まず３城の共通項として取り上げた登坂土塁について説明を行った後、個々の城郭の検討を行う。縄張検討では、その読解が基本的作業として重要となる。特に重点を置くのは、縄張の不整合を発見し、改修の痕跡を抽出することである。その推論を補完するために、文献史料による検証を合わせて行うこととする。最後に３城の傾向を比較検討することで、築城技術における吾妻地域の傾向を明らかにしたい。

城の改修を論じる場合、戦国大名の関与が重要な視点となってくる。いわゆる戦国大名系城郭の問題となるが、かつて縄張研究の王道であった武田氏系城郭・後北条氏系城郭といった視点は、やや難しい局面を迎えつつある。齋藤慎一氏は研究の現状について、「地域における城館像と戦国大名による築城を手続きなしに結びつけた戦国大名系城郭論ではなかっただろうか。現状の戦国大名系城郭論はまだ仮説の域を出ていないといえまいか」とした上で、「戦国大名自身が抱えたテクノクラート・地域性(言い換えるならば、地域に基盤を持つ技術者集団)・移動遍歴する技術者集団。これらが築城術を支えていた」と論じている(齋藤2003)。その後展開する織豊系城郭は、虎口革命の時代と位置づけられ、「城を守るためにも出入り口を軍事施設としての虎口として積極的に活用するというあり方は、革命的な転換である」(村田2018)とされる。本稿で城の改修を評価する際、戦国大名の関与を

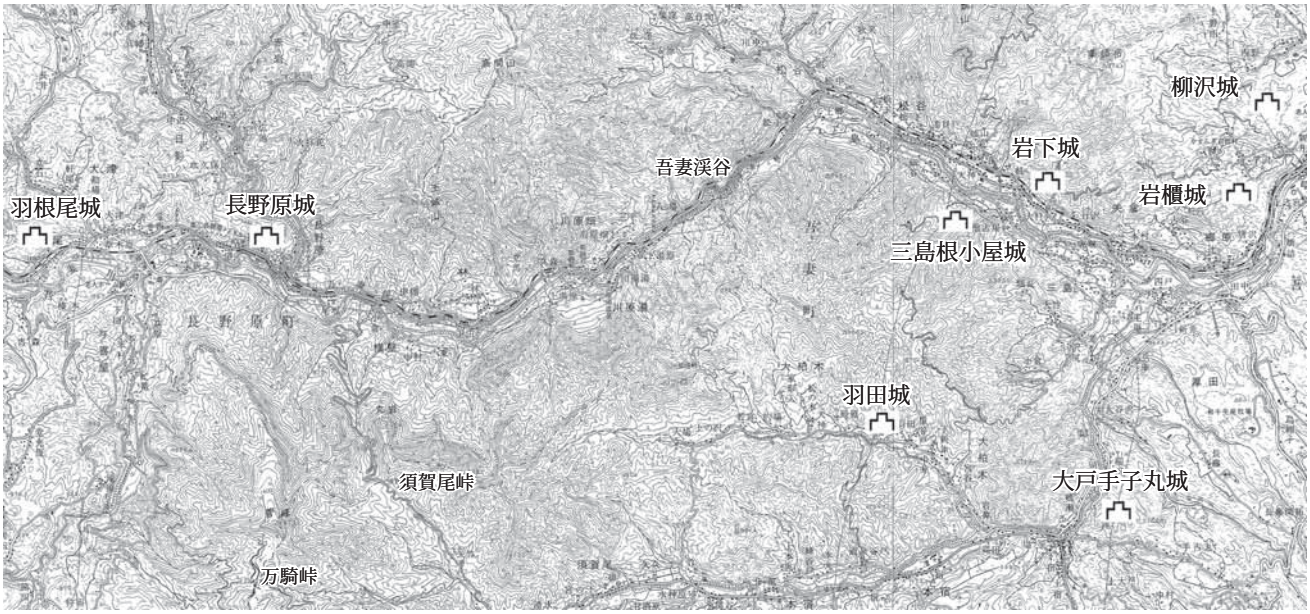

図１　吾妻地域主要城郭位置図(１:4000、国土地理院発行2.5万地形図「長野原」・「群馬原町」使用)

抜きに検討できないが、その指標として虎口のあり方に注目したい。

１．縄張と登坂土塁

村田修三氏の解説によれば、縄張とは「郭の配置を中心とした城の平面構造のこと」、「縄張の基本は郭の配置だが、堀(空堀・水堀)・塁(土塁・石塁)・虎口・道などの普請(土木工事)のすべてが縄張の構成要素となる」としている(村田1981)。本稿で着目する施設に、登坂土塁がある。管見の限り、同種の施設を指した用語が見つからないため、筆者が本稿で新たに呼称するものである。意味するところは、土塁でありながらも主要通路として機能し、ある程度の高低差を持つ郭同士を結ぶことから、登坂となったものを指している。土塁は城で標準的に使用されているものであり、特別な技術を要するものではない。しかも、この施設の場合、掘り残した状況が多く、結果として土塁状を呈したものと理解される。土塁を構築したのではなく、郭面を削平した結果形成されたと見なすことができる。むしろ重要な点は、郭面を配置する基本的な縄張に基づいて、結果的に構築された土塁であることにある。

図２は登坂土塁の標準形を示す岩下城の該当部分である。トーンで示した部分は元々緩い斜面であったが、Ａ２郭を構築するために削平されたものと考えられる。同時に登坂土塁ａが構築されることとなる。Ａ２郭と登坂土塁は一体として構築されたとみられる。登坂土塁を挟んだ腰郭の反対側も、切岸となると想定され、岩下城の場合大堀切となっている。

登坂土塁は、腰郭構築の仕方を反映した施設である。腰郭の構築パターンは、①腰郭を稜線中心に削平して構築するもの、②側面から稜線まで一体として削平して構築するもの(廻らし方は１方向から４方向まで)、③稜線

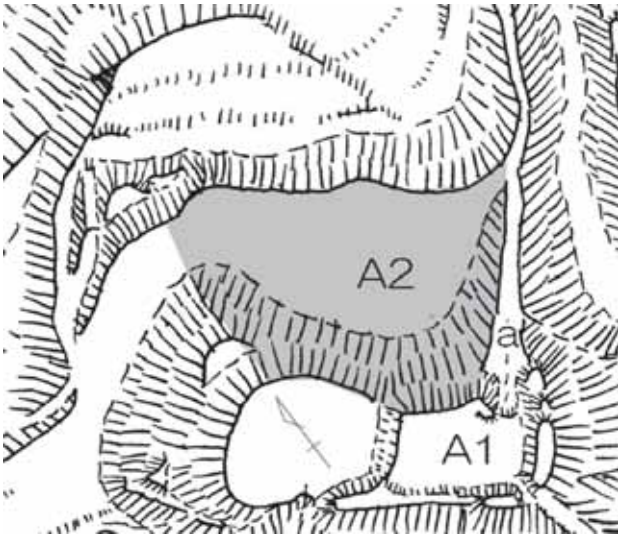

図２　岩下城登坂土塁(１:1000)

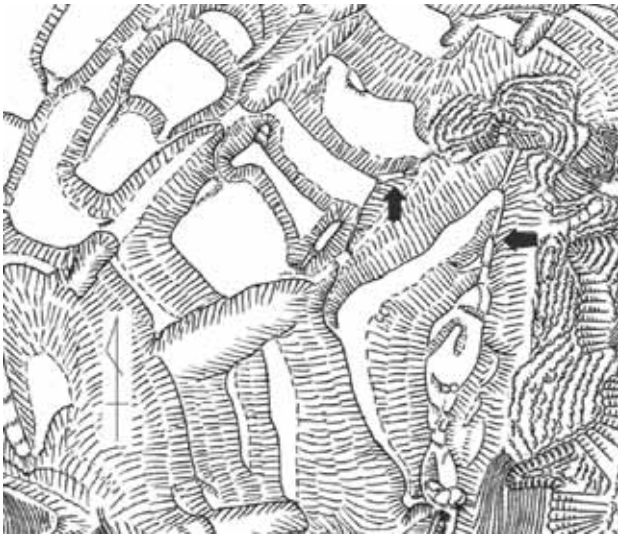

図３　柳沢城詳細図(１:2000)

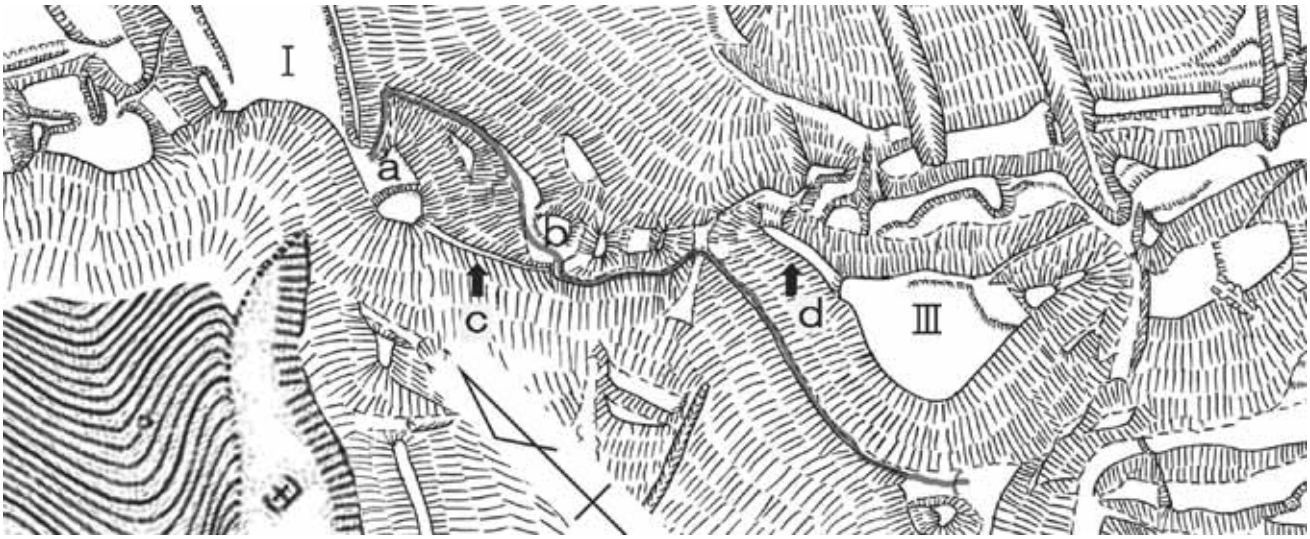

図４　松井田城詳細図(１:2000)

を残して凹み状に削平して構築するものに分けられる。登坂土塁は③に該当する。しかも、正確な数値による裏付けを持たないが、③の事例は多数派ではないだろう。山城に多くみられるのは、稜線を削平して郭面を構築し、堀切を併用して防衛線を構築するタイプである。③を採用することは、稜線を通路として利用する考え方を反映していよう。登坂土塁の使用に特別な技術は必要ないが、採用には何らかの要件を伴うものと考えられる。このためか、登坂土塁を使用した城は管見の限り少なく、本稿の３城のほか、吾妻地域では岩櫃城の古城と言われる柳沢城(図３)、碓氷・甘楽地域では松井田城(図４・安中市)、神成城(図５・富岡市)を挙げられる程度である。なお、課題となるが、柳沢城を在地勢力の城であると位置づけた場合、本拠とした勢力をどう考えるかという問題に展開する。

登坂土塁に内在する問題を示すため、松井田城を例として若干検討を行う。松井田城は永禄年間に武田氏が築城したもので、在地勢力安中氏が拠点とする諏訪城を攻略後改修したものと言われる。天正10年(1582)には北条氏支配下となり、更に改修が加えられた。登坂土塁は図４のｄ部分であり、安中氏時代に関わるとされる安中郭(図４のⅢ)の一部である。安中郭の位置付けは、伝承に過ぎないものの、登坂土塁がそこで見られるのは興味深い。

一方、北に位置する本郭(図４のⅠ)の南端に、登坂土塁ｃがあるが、通路として使用されていない。理由は櫓台ａがあるからで、状況から櫓台を後付けしたために、登坂土塁の通行ができなくなったと推測される。もし改修でなかった場合、櫓台ａの下斜面は登坂土塁でなく、切岸とすると考えられるため、この部分を改修と推測する。櫓台ａから馬出の機能を持つ小郭ｂへ向かう通路は、北側に設けられている。登坂土塁ｃ下部は、小郭ｂの南面の遮蔽施設として機能している。松井田城は、原初的な形態を残す登坂土塁ｄと、改修により通路として機能しなくなった登坂土塁ｃの両者を比較して見ることができる好例となる。松井田城が示す状況として、登坂土塁が在地勢力の築城に関わる部分とみられる点で重要である。この場合、築城時期が比較的古いために、築城技術が古様であるのか、在地の築城技術や縄張法を反映しているためか等の論点を提示するものと評価できる。

図５　神成城詳細図(１:2000)

２　大戸手子丸城

(１)城史

この城は吾妻郡東吾妻町大戸に所在する。山麓との比高差約150mの山城である。榛名山北西麓の北縁にあり、温川と見城川の合流点の下流側に位置する。南に面して堂満沢川が西流し、その上流に手子丸集落があり、城名の由来となっている。近世信州街道の大戸宿、大戸関所は、見城川を挟んだ西岸に近接する。信州街道は中世以前に遡る主要道であり、長野原方面へ向かう。大戸で東方に分岐する道は、温川沿いを中之条方面へ向かう主要道であるため、大戸は交通の要衝と位置づけられる。

大戸には信濃滋野一族の浦野氏(大戸氏)が勢力を持ち、永正６年(1509)に三河守が確認される(表１－１)。同10年に大戸要害の存在も知られ、浦野氏が在地勢力として拠点城郭を築城していたと考えられる(表１－２)。天文21年(1552)、北条氏が関東管領上杉憲政を平井城(藤岡市)から追うと、上野国はほぼ北条氏の勢力下となる。浦野氏は北条氏に与し、永禄３年(1560)頃に人質提出を求められた(表１－３)。また、浦野氏は翌４年上杉謙信に与し(表１－４)、翌５年には武田信玄へ服属する(表１－５)。同８年武田氏から離反し攻撃を受けるが(表１-10)、翌９年武田方に復帰し、箕輪城攻めに貢献する(表１-12)。天正10年(1582)武田氏が滅び、織田家滝川氏が撤退すると、大戸は北条氏の侵攻を受け、浦野氏は再び北条方となる(表１-17)。しかし、翌11年に北条氏から離反したため、攻撃を受け浦野氏は滅亡した(表１-21)。大戸城には北条氏により城将斎藤定盛が配置され(表１-26)、小田原合戦を迎えた。

大戸に攻撃を行った勢力として、永正６年の長野氏(表１－２)、永禄８年の武田氏(表１-10)、天正11年の北条氏(表１-20)を挙げることができる。永禄５年には武田氏が番勢を置いた可能性が高い。小田原合戦の際、真田方の吾妻衆が大戸を越えて松井田城攻めに参陣したという江戸時代の書物がある(『吾妻記』)。この際に開城したと考えられる。

築城・改修に関して、史料１(表１-23)がある。

史料１　北条氏政書状写　(諸州古文書)

大戸之地被取立由、殊嶮難ニ候欤、肝要至極候、委細

表１　大戸手子丸城関係文書一覧

№.	年月日	記事	文書名	発給者	受給者	出典	刊本
1	永正６．９	宗長、草津へ向かう途上大戸の海野三河守宿所に一宿す。	東路の津登				群1887
2	永正10．４	鷹留城主長野憲業、大戸要害の落居を祈願す。	長野憲業立願状	長野伊予守憲業（花押）	厳殿寺	群馬郡榛名神社文書	群1921
3	永禄３カ．９．15	氏政、謙信越山を受けて浦野氏に人質を要求。	北条氏政書状写	氏政（花押）	浦野中務丞	浦野文書　新編会津風土記	群2743
4	永禄４カ．	大戸中務少輔、箕輪衆として謙信に参陣する。	関東幕注文			上杉家文書	群2122
5	永禄５カ．５．19	信玄、浦野氏の服属に対し大戸城へ番勢を置く意志を伝える。	武田信玄書状写	信玄（花押）	浦野中務少輔	浦野文書　新編会津風土記	群2418
6	永禄５カ.11.10	甘利氏、与風を某地に呼び、緊急時の大戸への援兵を保証す。	甘利昌忠副状写	甘利昌忠（花押）	浦新（浦野新八郎）	内閣文庫所蔵「新編会津風土記」六	戦武809
7	永禄６カ．５．４	信玄、浦野氏等に某城の普請を命ず。	武田信玄書状写	信玄（竜朱印影）	山家薩摩守・城対馬守・浦野三河守	尊敬閣所蔵小幡文書	群2727
8	永禄６カ.12．９	甘利氏、浦野氏の筋目を申し調える。	甘利昌忠書状写	昌忠（花押）	浦中（浦野中務少輔）	内閣文庫所蔵「新編会津風土記」六	戦武848
9	永禄７．２．７	信玄、浦野某、同新四郎に三島ほかの替え地として、信州高梨領之内ほかを与える。	武田信玄判物	信玄（花押）	浦野三河守・同新四郎	岡山市浦野孝俊氏所蔵文書	戦武862
10	永禄８カ．９．12	明日大戸合戦之時刻について、信玄から真田幸隆へ伝える。	武田信玄書状写	信玄（花押影）	一徳齋	金沢市・加能越文庫所収馬場雅乗氏所蔵文書	戦武補遺90
11	永禄８カ.11.12	信玄、日向氏に大戸氏の帰入を命ず	武田信玄書状写	信玄（花押影）	日向大和入道	聴濤閣集古文書	群2302
12	永禄９カ．５．８	信玄、浦野氏が武田氏に味方し、権田に放火したことを賞する。	武田信玄書状	信玄（花押）	海野中務少輔	浦野文書　大竹源三氏所蔵	群2728
13	（永禄９）.閏８.19	信玄、岩櫃から越後衆沼田著陣を知り、根津氏らを長野原まで遣したことを浦野氏らに伝える。	武田信玄書状写	信玄	山家薩摩守・大井源八郎・依田又左衛門・浦野宮内左衛門	国立国会図書館所蔵「武家事紀」	戦武1005
14	永禄９カ．９．10	信玄、箕輪攻めに際し、浦野氏が敵境を放火したことを賞する。	武田信玄書状写	信玄（花押影）	浦野中務少輔	浦野文書　新編会津風土記	群2327
15	永禄12カ．２．２	相甲対陣の際、沼田在城衆に大戸・岩櫃筋への出陣を請う。	遠山康英覚書	遠山新四郎康英（花押）	松本石見守・河田伯耆守	上杉家文書	戦北2436
16	永禄12カ．３．３	氏康、由良氏からも沼田衆の大戸・羽尾・岩櫃筋への手切動を助言させる。	北条氏康書状写	氏康	由良信濃守	御書集九	戦武1171
17	天正10．６.22	北条氏、大戸に禁制を出す。	北条家禁制写	（虎印墨書）安房守奉之		君山合偏二十	戦北4743
18	天正10カ．９.18	大道寺氏、大戸氏を内藤氏へ取りなす。	大道寺政繁書状写	大駿政繁（花押影）	大民	浦野文書　新編会津風土記	群3176
19	天正10.10.19	昌幸、唐沢氏に手子丸２貫文、宇津野４貫文、寺原小山分７貫文、青屋５貫文、合わせて18貫文の所を付与す。	真田昌幸朱印状写	昌幸朱印	唐沢玄蕃	上野国吾妻記	戦真118
20	天正10.10.22	氏直、大戸入道に真田氏の逆心を報じ、吾妻攻めを伝える。	北條氏直書状	氏直（花押）	大戸入道	富田仙助氏所蔵文書	戦北2433
21	天正11カ．９．10	氏政、神宮武兵衛に命じて鉄砲衆に大戸攻めの加勢を命ず。	北条家朱印状写	虎朱印影	神宮武兵衛	後閑文書	戦北2856
22	天正12．２．16	大戸之寄居普請のため、松井田旗本衆に人足集めを命ず。	北条家朱印状	塀和伯耆守奉之	下久三郎、山口軍八郎、神宮武兵衛	小板橋文書	群3281
23	天正12カ．３．２	氏政、氏邦に大戸の地取り立てを質す。	北条氏政書状写	氏政（花押影）	安房守	諸州古文書	群3096
24	天正12カ．４.25	氏直、猪俣氏が仙人ヶ岩屋を計策により乗っ取ったことを賞す。	北条氏直書状	氏直（花押）	猪俣能登守	東京大学大史料編纂所所蔵猪俣文書	群3294
25	天正12カ．９．12	羽尾氏の在所働きに合力した浦野民部の活躍を上申することを伝える。	岩井信能書状案	岩民信能	浦民		信濃史料補遺編上641頁
26	天正13カ.11.14	羽尾修理亮、証人を大戸根小屋差し越す旨、斉藤定盛に返答す。	斉藤定盛書状写	斉藤摂津守定盛（花押押）	矢部大膳亮	彦久保秀三郎所蔵文書	戦北4127

＊群：群馬県史資料編中世、戦北：戦国遺文後北条氏編、戦武：戦国遺文武田氏編、戦真：戦国遺文真田氏編

者、氏直可被相達間、閣筆候、恐々謹言
三月二日　　氏政（花押影）
安房守殿

北条氏が攻略した大戸城の取り立てを、北条氏邦が担当したことを示している。嶮難という文言から、大戸手子丸城を指すと考えられるが、新たに築城したとは考えにくく、改修とみなされる。大戸宿西側には大戸平城（図６）があるが丘城であるため、武田氏の攻撃に対応できたとは考えにくく、浦野氏の本拠は大戸手子丸城であったと考えられる。また、西方に「堀之内」地名があり、平城の存在も含めて、大戸宿西側に隣接して平時の拠点城館の存在を想定することができる。

（２）縄張状況

城の範囲は、岩壁を露出させる東西方向の主尾根の長さ約500mに及び、北へ樹枝状に延びた５条の枝尾根を城郭化する。登城路の別によって郭配置に特徴があるため、郭群をＡ・Ｂ・Ｃの３か所に区分して検討を行う。

郭群Ａは城の西半分を占め、基幹となる部分であり、北へ延びた３条の枝尾根を含んでいる。西から３番目の枝尾根に、大手道①が設けられている。Ａ１郭が主郭であり、尾根の頂部を三角形に使用する。そこを起点として枝尾根上に階段状の郭を配し、城内で広い郭が最も集中することから、この城の主城部と位置づけられる。顕著な特徴は、尾根の最下部まで手を加えていることである。尾根中腹の図７のｂ付近では、堀切や竪堀が多く設けられ、防御ラインを形成している。この城の攻防は、主に西側を流れる温川対岸との間で行われており、西端の尾根が最前線となったからである。また、高低差の大きい上下の郭を連絡する手立てとして、ａ１・ａ２・ａ３の登坂土塁が設置されている。この施設は特徴的な仕様と考えられるが、郭群Ｂ・Ｃでは見ることができない。

図６　大戸手子丸城・大戸平城・堀之内位置図

郭群Ｂはこの城の中央に位置し、尾根にＢ１・Ｂ２郭２か所のピークを持ち、枝尾根１条を伴う。Ｂ１郭は狭いが郭群Ｂの最高所であり、郭を配置する３方向全てを視野に入れる位置にある。郭群を特徴付けるのは、登城路②との関係である。城全体として北向きに防御を展開する傾向に対して、郭群Ｂは南向きの配慮がなされている点で、城内では変化のある部分である。南麓の登城路②は大戸宿への連絡路となる。②から登り上げると、図７のｃで郭群Ｂに達する。ｃへ向かって東上方から土塁が下り、北側に武者走りを設けて進入路とする。図８の竪堀ｅはその通路の通行を規制し、東脇に武者溜まりｆを設ける。Ｂ２郭へ向かうには土塁西の虎口から一端Ｂ３郭に入り東へ向かう。Ｂ２郭は郭群Ｃ方向への備えを強く果たしている。

郭群Ｃは城の東端に位置し、中央にＣ１郭を配置し、枝尾根１条を含んでいる。登城路③は手子丸集落へ結ぶルートであり、頻繁な通行を推測することができる。郭群Ｃはこの方面からの通行に配慮した特徴を持っている。虎口ｈは南北に二重の竪堀を設けて、通行を規制している。Ｃ１郭の東面には武者だまりｇを配置する。通路はＣ１郭の北側を回り西へ向かう。Ｃ１郭は頭上からこの通路を監視することに配慮している。通路は更に尾根を北へ迂回して、郭群Ｂ方向へ向かう細尾根を通過する。その後、Ｂ２郭東面腰郭の壁面にぶつかり、右へ向かっていくこととなる。

（３）改修の評価

城域はＡ・Ｂ・Ｃの３か所の郭群に大きく分けられ、郭群Ａが主城部にあたり、郭群Ｂ・Ｃは登城路への備えを優先した構造であると考えられる。竪堀による虎口の規制は、郭群Ｂの竪堀ｅや郭群Ｃの二重竪堀ｈで見られる。Ｂ・Ｃの郭群の方が遮断系施設を巧みに使用して、技巧的に優れた印象を受ける。武者だまりｆ・ｇも同様に技巧的である。郭構造の違いを生じさせた要因は、登城路の性格にある。登城路②は大戸宿と結ぶ登城路である。「大戸」は、北条家禁制（表１-17）により「郷」として扱われる集落であった。町場が形成されていたかどうかは不明だが、地域で中核的な集落であったと考えられる。史料上「大戸根小屋」（表１-26）の存在も知られるが、根小屋の位置を特定することは難しい。登城路③と結ばれる手子丸集落もこの城と結び付くことは確実である。手子丸集落も所領としての価値を有していた（表１-19）。郭群Ｃは手子丸集落から高低差の少ない尾根続きであるため、周到な縄張を施したものと推測される。登城路②・③は城と日常的な生活環境を結び、補給路でもあるような性格を帯びていたのだろう。極端に言えば、登城路に対して郭を設営したのが、郭群Ｂ・Ｃであるということ

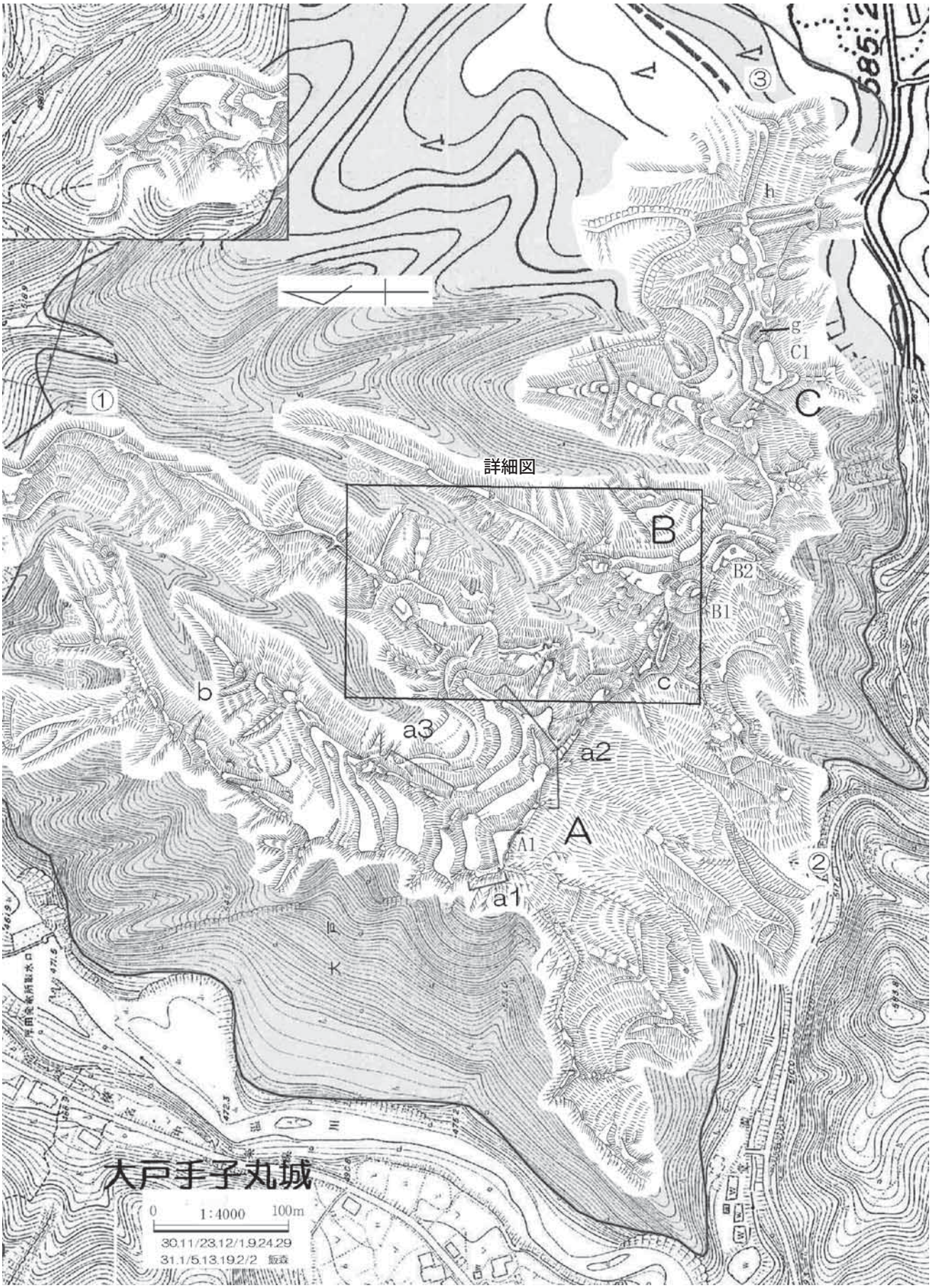

図７　大戸手子丸城縄張図（１：4000、下図『東吾妻町遺跡分布地図』2019使用）

もできる。登城路をどう規制するかに意識が置かれている。

一方、登城路①は緩やかで長大なルートをとり、郭群Ａの攻撃正面となる大手道である。北麓に居住空間も想定されるが、郭群Ａは主城部にあたり、その大手道が登城路①である。登城路に対しては、郭へどう出入りするかに眼目を置いたものとなる。郭群Ａで特徴的に使用される施設として、登坂土塁ａ１～ａ３がある。これは高低差のある郭間を結ぶ通路であると同時に、郭縁辺を防御する遮蔽効果を持っている。図８は大手道の走行を示した部分である。ａ４は尾根部であるが、堀切３か所を設け、一部は武者だまりとして機能していたとも考えられる。また、登坂土塁の痕跡と考えられる部分もあり、改修された可能性をうかがわせる。ａ２とａ４で全く様相が異なるからである。その転換点は大手道の屈曲部ｄであり、登城路はここで折り返し、斜面を尾根へ向かって斜めに登ることとなる。到達点はａ２とａ４の間であり、ここから登坂土塁によりＡ１郭方面へ向かう。こうした部分に特段虎口施設を設けないのが、この城の傾向らしい。ａ４は東下を通る登城路を頭上から監視しており、郭群Ｃと共通する状況を認める。

図８　大戸手子丸城詳細図（１:2000）

また、登城路はｄで分岐し、直進するルートは郭群Ｂへ結んでいる。郭群Ｂ・Ｃへ向かうルートはここしかなく、重要な道である。ａ４と大手道の関係が、郭群Ｂ・Ｃの登城路への備えと共通すると考えると、これらを一連の縄張と考えることもできる。郭群Ａが最大限郭面を広く階段状に配置して、シンプルな傾向を持つ点に反して、ａ４や郭群Ｂ・Ｃの技巧性は際だって見える。おそらく、改修によると考えられる。ａ４には当初登坂土塁があったと推測される。ただし、郭群Ａ・Ｂ・Ｃの構成は登城路と関わり、築城当初から前提条件として存在した。この技巧的な部分をもたらした契機を、登城路の切り替えに求めることは難しい。

３　岩下城

（１）城史

この城は吾妻郡東吾妻町岩下に所在する。山麓との比高差約100ｍの山城である。吾妻川へ大沢川が合流する東岸に位置する。吾妻川北側の山並みから突き出した独立山で、一部に切り立った岩塊が見られる。

岩下では藤原姓の斎藤氏が国衆として勢力を持ったが、天文２年(1533)には岩下氏と斎藤越前守の存在が知られる(表２-２)。永禄４年(1561)に謙信へ参陣した岩下衆の筆頭者は斎藤越前守であり(表３-６)、この人物が岩下城を本拠としたと考えられる。前年に謙信が岩下を攻略したことから(表３-５)、岩下は地域の拠点であったとみなされる。斎藤氏は一度武田氏へ服属したが上杉氏へ帰参し(表３-７・８)、永禄７年正月までに、この城は武田氏に攻略された(表３-10)。直後は鎌原氏らが在番を務め、小山田氏によって城普請が行われたものの(表３-11)、以後史料上確認できず廃城となったと考えられる。要因は同時期武田氏により、岩櫃城の取り立てが行われたからであろう。その後、わずかに史料上にみられるが(表３-12)、領名の名残りと考えられる。

史料２(表３-11)が改修に係わる史料である。

史料２　小山田信有書状(東京都諏訪家旧蔵文書)
今年之為祈念、遠路是迄巻数・守、以代官被越候、目出々候、弥以無油断祈念専要候、特串柿到来珍重候、此間者岩下城普請、昨日又当地大前之為普請移候、恐々謹言
　　正月廿三日　　信有(花押)
　　小佐野越後守殿

小山田信有は翌年若くして死去しており(平山2006)、特に城普請を熟知していたという記録もない。大前城の普請にも訪れており、何らかの使命を帯びていたと考えられる。「為普請」と明言している以上、直接関わった可

表２　岩下城関係文書一覧

№.	年月日	記事	文書名	発給者	受給者	出典	刊本
1	文亀元．９．27	岩下(斎藤)顕幸、父の17回忌を岩下で行う				諸仏事香語	森田論文2009
2	天文２．２	北条氏による鶴岡八幡宮の再建に対し、岩下氏、斎藤越前守ら上野諸将が寄進を行う。				快元僧都記	群1971
3	(永禄元).閏６．18	氏康、吾妻谷攻めを図り、安中氏に出馬要請。	北条氏康書状写	氏康(花押)	安中越前守(重繁カ)	井伊文書	戦北4653
4	永禄２.10.23	北条氏、岩櫃・嶽山領中の百姓に帰住を命ず	北条氏朱印状写	虎朱印		岩櫃城伝記	戦北613
5	永禄３.10.２	謙信、９月上旬に岩下ほかを攻め落とす	正木時茂書状写	時茂	越府人々	歴代古案	群2104
6	永禄４カ.	岩下衆　斎藤氏ほか謙信に参陣する。	関東幕注文			上杉家文書	群2122
7	永禄５	信玄が検使により鎌原領と定めた三原の内を、斎藤氏押領す。	武田信玄書状写	信玄(花押影)	鎌原筑前守	鎌原四郎氏所蔵「鎌原系図」	群2230
8	永禄５カ．２.28	斎藤氏、箕輪長野氏を介して、謙信に許しを請う。	須田栄定書状	須田尾張守栄定	政景	上杉家文書	群2159
9	(永禄５)．３.26	信玄、斎藤越前守との不和から在所を引いた場合、鎌原氏に所領を約す。	武田信玄書状	信玄(花押)	鎌原宮内少輔	真田宝物館所蔵、伏島家文書	群2163
10	永禄７カ.正．22	鎌原氏、岩下の人質を取り、岩下城の在番を勤める。	武田信玄書状	信玄　竜朱印	蒲原宮内少輔	国立国会図書館所蔵文書	戦武861
11	永禄７カ.正．23	小山田信有、岩下城普請を終え、大前の普請に移ったことを伝える。	小山田信有書状	信有(花押)	小佐野越後守	諏訪家旧蔵文書	戦武948
12	天正10カ．３.21	武田氏の滅亡に際し、岩下他が北条氏に出仕していない状況を伝える。	矢野綱直書状写	矢野因幡守綱直	栗林	覚上公御書集巻六	越2311

＊群：群馬県史資料編中世、戦北：戦国遺文後北条氏編、戦武：戦国遺文武田氏編

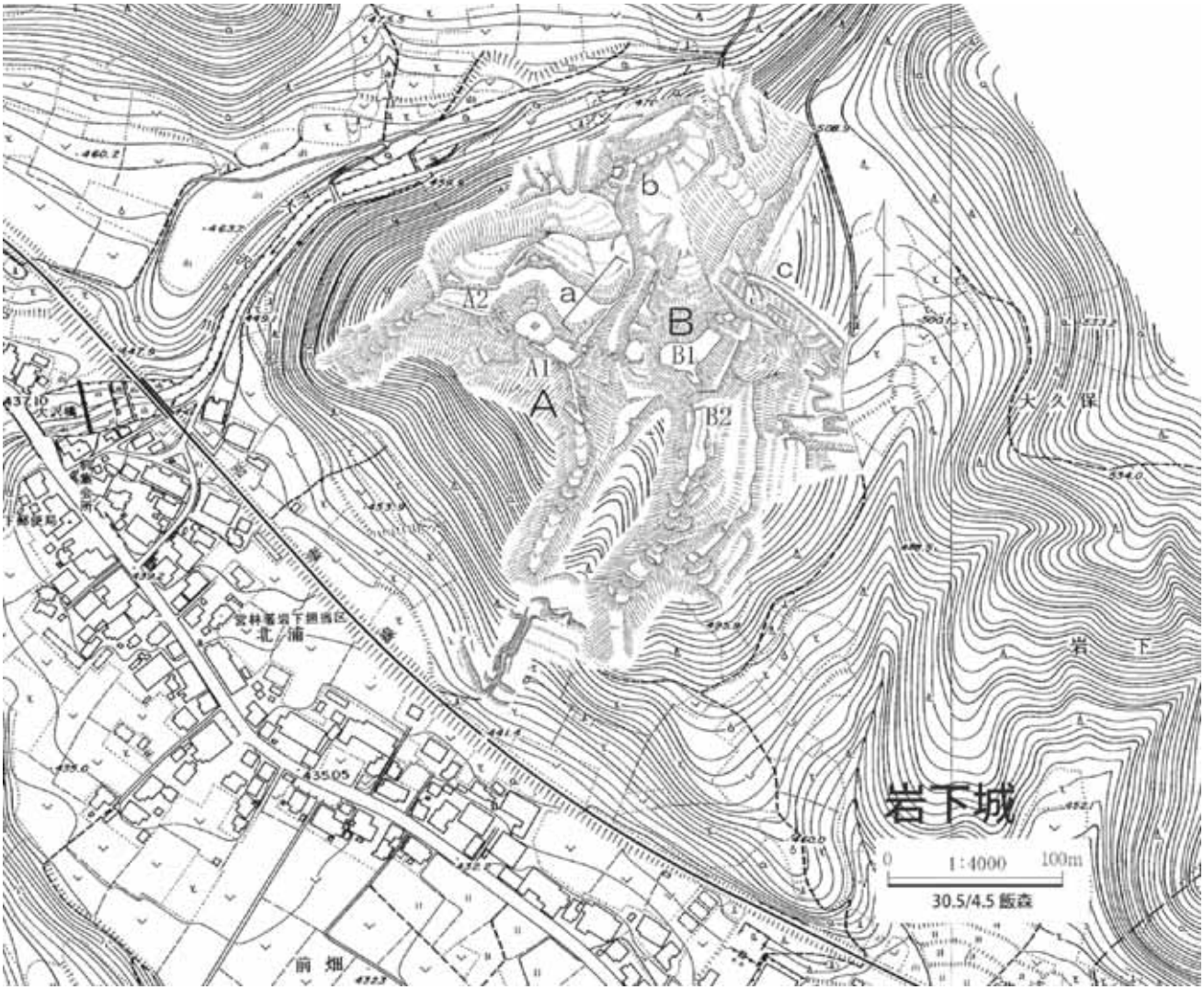

図９　岩下城縄張図（１：4000、下図『東吾妻町白図』１：2500使用）

能性が高い。小山田氏の移動は比較的短期間であった印象を受ける。

（２）縄張状況

城域は中央部の大堀切によって二分されるため、突端側を郭群Ａ、尾根側を郭群Ｂと呼称して検討を行う。

郭群Ａは尾根から分離した独立山で、最高所にＡ１郭がある。Ａ１郭は２段で構成され、規模は長さ約20mずつで、低い西側には社があり、南急斜面に参道を設けている。ここを大手道とするのは、郭配置からみて無理があるため、西側尾根に設けられた腰郭群を経て、Ａ２郭に達したと考える。Ａ２郭はＡ１郭の西から北側を囲んでおり、図９のａの登坂土塁からＡ１郭に登ることとなる。登坂土塁は長さ約30mと長大で、Ａ１郭に虎口を設ける。ａはＡ２郭下段へも約25m延びている。この登坂土塁は郭群Ｂに対する遮蔽効果を持っている。Ａ２郭より下段は削平が未熟だが、北端のｄに堀切があり虎口を想定できる。

郭群Ｂは南北に長い尾根上に立地する。最高所がＢ１郭でＡ１郭より低く、見下ろされる関係にある。このため、郭群Ａを主城部分と位置づけることができる。郭群Ｂで特徴となるのが北尾根筋の堀切・竪堀の配置で、竪堀Ｃは長大で尾根裾に及んでいる。北尾根筋は傾斜が緩く、侵入が容易なため、厳重に備えたものと推測される。対して、Ｂ１郭の南尾根筋は多数の腰郭を重ねている。Ｂ２郭は南北約40m規模と長いが、東面の削平は半端である。西側谷筋への意識が高く、谷からの登城も想定される。相対する郭群Ａ側の尾根も、少量ながら腰郭を配置している。大堀切を設ける中央の谷地形に登城路を設け、両側の尾根から監視している状況とみなされる。

郭群Ａ・Ｂの連絡は悪く、別々に機能していると見なすことができる。意図的に城域を二分割したかは不明だが、結果としてそうした効果をもたらしている。ただし、Ａ１郭とＢ１郭が近接することで中央部に求心性があることも認められる。攻撃正面はともに南方で一致しており、一つの城として統一感はとれている。

（３）改修の評価

郭群Ａを特徴付ける施設が登坂土塁ａであり、この城の登坂土塁は、この施設の標準形と位置づけられる。郭群Ｂでは大堀切縁辺を除いて、これが見られず統一感に欠ける面がある。郭群Ｂを特徴付けるのは、堀切の多用と大竪堀の配置である。これにより両郭群の印象が全く異なっている。したがって、郭群Ｂの堀切と竪堀は改修により後付けされたと考えられる。また、郭群Ａの堀切ｂも竪堀ｃと周辺状況が似ており、同時期に改修された可能性がある。改修において、岩下城は相対的にその度合いが少ないだろう。その一つが、武田氏の攻略に伴う永禄７年の小山田信有等による城普請となる。その際の改修部分のみを特定することは難しいが、その後廃城を迎えた点から、城の最終形は主に武田氏の影響を残すと考えられる。

なお、根本的な問題だが、この城は国衆斎藤氏の本拠として岩下領の主城館とみられるが、小規模な印象を否めない。要因は斎藤氏の力量によるのか、この城の位置づけの問題なのか、一概に判断することは難しい。

４　長野原城

（１）城史

この城は吾妻郡長野原町長野原に所在する。山麓との比高差約130mの山城である。吾妻川と白砂川の合流点上流側北岸に位置する。近世草津道・真田道上の宿として長野原の町場が形成され、この城は町場背後の山稜に選地する。城は東西端を除き大半は岩場であり、別名箱岩城とも呼ばれる険阻な山城である。長野原の町場東端は、須川橋で白砂川を、琴橋で吾妻川を渡る渡河点で、交通の要衝である。

文書史料で長野原城を明記したものはない。関係史料から存在を推測するしかない状況である。ただし、江戸時代に成立した『加沢記』には、「長野原合戦之事」の項立てがあり、永禄６年（1563）９月の「長野原の用害」における合戦を記している。城兵は真田幸隆の舎弟常田新六郎を大将とする武田勢であり、攻め手は海野能登守を大将とする岩下斎藤勢とされる。この合戦は鎌原氏と羽尾氏の代理戦争とされ、常田氏は討ち死にし羽尾氏が長野原城を奪回して終わる。この合戦に関わる史料は、この記事しかないことから、記載内容をそのまま信じることは難しい。一方、長野原は羽尾領であったことから、羽尾氏が関係する合戦の存在も想定できるが、具体像は不明とするしかない。

永禄７年正月までに岩下斎藤氏が滅ぶと、羽尾領も分割され、論功行賞として湯本氏に羽尾領立石・長野原が付与された（表３－１）。長野原城は武田方湯本氏の勢力下となったと考えられる。長野原は岩櫃へ向かう武田勢の中継点となっており（表３－２・３）、長野原城は繋ぎの城と位置づけられる。

天正10年（1582）湯本氏は、織田政権撤退にいち早く対応し吾妻城（岩櫃）を確保していたが（表３－４）、真田昌幸から羽根尾城（長野原町）在城を申しつけられ（表３－６）、上信国境地域の在地勢力に命令する立場を得た。なお、真田氏と湯本氏の連絡役として浦野儀見斎がおり、同年は羽根尾城下に屋敷地を得ていたが（表３－５）、同18年までに長野原城下へ移っていたため（表３-11）、湯本氏の拠点も長野原城へ移っていた可能性が高い。湯本氏が長野原城へ移った契機として、同12年頃の羽尾氏による在所奪回の動きが想定される（表３－７・８）。これ

は上杉氏の支援によるもので、真田氏との対立に由来する。あわせて、上杉氏による湯本氏調略も試みられている。長野原城は羽根尾城よりも規模が大きく、要害性が高いため、本拠の移動がなされたと考えられる。以下の史料(表３-９)は、その可能性をうかがわせるものである。

史料３　真田信幸書状(長野県河原文書)

尚々申越候、其元静候者、其方事も帰宅候て休息尤之由候、以上

急度飛脚指越候、殊ニ吾妻其地静謐候由、一段御満足候、鎌宮事其地へ早々被相移由、肝要ニ被思召候、弥静候者、鎌宮事早々帰宅尤候由、御意候、其分御心へあるへく候、急度重而、恐々謹言

極月廿八日　　信幸（花押）

(奥ウハ書)

「川左

御返事　　信幸」

其地は吾妻（岩櫃）以外の重要な場所であり、有事のため鎌原宮内少輔（鎌宮）が急ぎ移り、河原綱家（川左）も同所に詰めていた。事態の収束が見込まれ、鎌原氏は本拠鎌原への帰宅を許された。あわせて、河原氏も状況により帰宅を許されている。河原氏は昌幸の家臣であり、「綱家・鎌原宮内少輔・湯本三郎右衛門尉と牒し合せ、真田より討て出、我妻の敵を数度追退けし功を以て度々御加増」(「河原右京亮」『本藩名士小伝』）とあるため、真田（長野県）に居住していた。岩櫃と鎌原の間で、鎌原氏や河原氏が在城する場所は、羽根尾城か長野原城しか考えにくい。しかも羽根尾城は、駐留する城として狭すぎる。したがって、長野原城が比定地となる。

史料４　真田昌幸書状(長野県河原文書)（表３-10）

追而彼書状、早々吾妻へ御渡専一候、

□吾妻之注進状□而被指越候、早速□著祝著候、仍其□仕置被申付、両所□者、早々吾妻へ御移□候、随而可然物主被相□、鉄砲十五丁充名□桃へ早々可有御移候、□不可有御油断、委曲□田可申候、恐々謹言

表３　長野原城関係文書一覧

№.	年月日	記事	文書名	発給者	受給者	出典	刊本
1	永禄７．２．17	信玄、湯本氏に本領のほか、羽尾領内立石・長野(原)等を与える。	武田信玄判物写	信玄　判	湯本善太夫	加沢記所収文書	群2231
2	永禄８ヵ．３．13	信玄、越後衆沼田出張で曽根氏を長野原辺へ派遣、真田指図で岩櫃へ移入、清野氏にも吾妻出陣を命ず。	武田信玄書状写	信玄　判	清野刑部左衛門尉	内閣文庫所蔵「加沢記」	戦武931
3	(永禄９).閏８．19	信玄、岩櫃から越後衆沼田著陣を知り、根津氏らを長野原まで遣る。	武田信玄書状写	信玄	山家薩摩守・大井源八郎・依田又左衛門・浦野宮内左衛門	国立国会図書館所蔵「武家事紀」	群2321
4	天正10．６．21	(滝川氏撤退に呼応し)湯本氏が早々吾妻城(岩櫃)に着城したことを賞し、西中条之地を堪忍分として昌幸より与えられる。	真田昌幸書状	昌幸(朱印)	湯本三郎右衛門尉	兵庫県熊谷次郎氏所蔵文書	群3184
5	天正10.10．４	昌幸、使者奉公を賞し、浦野儀見齋に羽尾の内に屋敷分５貫文を与える。	真田昌幸感状	昌幸(花押)	儀見齋	浦野元男氏所蔵文書	群3184
6	天正10.10.14	昌幸、湯本氏に羽尾在城を申しつけ、普請を命ず。	真田昌幸定書	昌幸(花押)	湯本	熊谷次郎氏所蔵文書	群3188
7	天正12ヵ．３．28	羽尾源六郎が丸岩へ乗り入れたことを賞し、岩井らに保持することを命ず。	上杉景勝書状	景勝	岩井備中守	歴代古案	越2906
8	天正12ヵ．４．１	羽尾氏が三原で本意を遂げたことを賞し、須田氏に湯本三郎左衛門調略を命ず。	直江兼続書状写	直江山城守兼続	須田左衛門佐	歴代古案	群3291
9	天正14ヵ.11.28	吾妻(岩櫃)と其地が静謐となったため、移っている鎌原氏と河原氏の帰宅許可を伝える。	真田信幸書状	信幸(花押)	奥ウハ書「川左」	長野県河原文書	群3460
10	天正14ヵ.□.12	昌幸、湯本氏らへ到着を褒め、其地の仕置き後、吾妻へ移り、次いで名胡桃へ移ることを命ず。	真田昌幸書状	昌幸(花押)	奥ウハ書「□左・鎌宮・湯三」	長野県河原文書	群3461
11	天正18.12.21	信幸、知行改めの結果、浦野儀見齋に長野原での奉公を賞し、５貫文を与える。	真田信幸充行状	北能登守奉之	儀見齋	浦野元男氏所蔵文書	群3666

＊群：群馬県史資料編中世、戦北：戦国遺文後北条氏編、戦武：戦国遺文武田氏編、越：上越市史別編

図10　長野原城縄張図（1：4000、下図『長野原町白図』1：2500使用）

□月十二日　　昌幸（花押）
（奥ウハ書）
「□左
　鎌宮　　安房守
　湯三　　」

史料４も同様に長野原城が「其地」の比定地となる。ここでは湯本三郎右衛門尉も加えた３名の軍事行動となる。吾妻（岩櫃）へ移り、名胡桃が最終目標となる。この間、「其地」を留守にするため、備えを整えていたこともうかがえる。長野原城は武田氏時代から繋ぎの城として機能していたが（表３－２・３）、真田氏時代にも同様な役割を果たしていたことを示している。

（２）縄張状況

この城が使用する主尾根は岩山を多く含み、東西延長約800mに及ぶ大城郭である。図10に示したとおり、郭群はＡ～Ｄの４か所に区分できる。ただし、郭群Ａ・Ｂは連絡が取れており、一体として機能していたとみなされる。

郭群Ａはこの城の西端に位置する。緩やかな西尾根を使用する。大手口は西方の図10の①で、南北二重の竪堀で虎口を規制している。Ａ１郭は尾根の最高所で、東端は三角形の土壇である。そこから西方へ長さ約40mの細尾根が延び、西端のＡ２郭と繋がる。Ａ１・Ａ２郭ともに北斜面に相似形の腰郭を設け、竪堀ｄを挟んで左右対称に近い様相を示す。Ａ１郭から直下の腰郭へ連絡する通路が、ａの登坂土塁である。Ａ１郭は望楼等を設けた郭であり、北側直下の郭が面積的に主郭であり、西端に枡形ｃが設けられている。ｃを発した通路は、図11のとおり、ｄの竪堀を堀内道として使用し、ほぼ最短距離で大手口①に至る。ｃの西上の区画は一段高く、通路を頭上から射程に入れている。またｅの竪堀も堀内道となって、この通路に合流する。郭群Ａの縄張は、大部分の郭の出撃路がこの通路に向かって樹枝状に集結する点で、攻撃的な構造とみなされる。

視点を変えて、この通路へ西方城外から進んだ場合、大手口①から二重の竪堀の間を東へ進むと、正面の壁面にぶつかり、左手の斜面に設けられた細い通路を通り、枡形状の空間ｆに到達する。この通路には並行して南に大土塁が設けられて、南方からの攻撃力は強い。Ａ１郭へ向かうルートは、左手斜面を登ることとなるが、登城路としては急坂で難がある。一方、空間ｆの南面大土塁の東端に虎口が開いており、南内側は幅の狭い枡形ｇとなっている。登城路とすれば、こちらのルートの方が自然である。このルートは、西斜面を屈曲しながらＡ２郭へ向かっていく。このルートを通用路とすれば、ｃからほぼ直進するルートは戦闘時の出撃ルートと考えられる。

郭群Ｂは東端に切り立った岩山である箱岩を備え、尾根最高所Ｂ１郭を主郭とする。Ｂ２郭は秋葉山出丸とも呼ばれ、郭群Ａの出丸という位置づけもなされている（山崎1978）が、Ｂ２郭は堀切の形状から西方を外側と見なしており、Ｂ１郭を主郭とした縄張と考えられる。登城路は箱岩下の②であり、南の急斜面を攻め上ることは難しい。登城路②西方の低地には広い郭群が配置され、駐留空間と位置づけられる。特徴的な施設は長大な竪堀ｈであり、郭群Ａ方向からの侵入に備えている。

Ｂ２郭から南下方へ延びる細尾根は西側谷地との比高差が大きく、竪堀ｈと一体化して堅固な防御機能を形成する。Ｂ２郭を核とする防御施設は東側駐留空間を守るものと考えられる。したがって、郭群Ｂは守備に重点を置く空間と結論づけられる。郭群Ａと郭群Ｂは連絡関係にあり、郭群Ｂを駐留地として郭群Ａを攻撃面に特化した空間とする主従関係にある一体化した郭群と見なすことができる。登城路は①を大手口とし、②を宿町への通用口としたものと考えられる。

郭群ＣはＣ１郭を主体とする郭群であり、小規模なため出丸のような位置づけと考えられる。登城路③は緩傾斜で幅の広い見通しの良い斜面である。南麓にある諏訪神社裏から進み、谷地形を登り上げるが、途中に防御施設などはなく郭群Ｃに達する。東に接する郭群Ｄとは北面の尾根ｉを境とし、多くの竪堀により連絡を断っている。一方、西方の郭群Ｂは箱岩の岩壁を登る手立てを講

図11　長野原城詳細図（１:2000）

じれば連絡は可能であり、箱岩南斜面を迂回するルートも存在する。郭群Ｃを出丸と位置づければ、郭群Ａ・Ｂに帰属し東方からの侵入に備えたものと考えられる。

郭群Ｄは城の東端に位置する。Ｄ１郭は最高所で、東西長約40m幅約15mと規模も大きく、北尾根に複数の郭を展開して、充実した郭構成となっている。Ｄ１郭の西面には高土居と堀切を設ける。西方北斜面に長大な二重竪堀ｊを設け、北尾根ｉ方向からの侵入を堅く防いでいる。郭群Ａ・Ｂ・Ｃとの連絡を全く図っていない点は注目される。ｋは段差の少ない登坂土塁と考えられ、郭群Ａと合致する特徴的な仕様と見ることができる。登城路④は急斜面ながら、東麓の集落から登り上げるルートであり、宿町と直接繋がっていない。

（３）改修の評価

郭群Ａは通用路と出撃路を備えている。この構造は改修によって生じたものと考える。手がかりはｂとした尾根の部分にある。上段は枡形ｃと通路に当たるが、直下の腰郭では削平の悪い凸凹を残し、下段は中途半端な三段の削平地となっている。この形状は元来尾根が残され、土塁あるいは登坂土塁として機能していたものを、削平した状況と考えられる。削平の目的は、尾根を取り除くことで東奥の郭から竪堀ｄへ直接向かうルートを開いたと推測される。

また、この改修は出撃路である竪堀ｄの機能に連動することから、竪堀ｄ自体が改修により付加された可能性が高い。竪堀ｄを取り除いた縄張では、Ａ１郭と腰郭、Ａ２郭と腰郭が、尾根ｂを境に整った左右対称となることから、郭群Ａの原初形態と考えられる。一方、この出撃路の終点は、空間ｆや二重竪堀、Ｌ字形にクランクする竪堀と土塁を設けた空間であり、城内で最も技巧的な縄張となっている。したがって、この部分も改修によって強化された可能性を想定する必要がある。

城全体の構成において、郭群Ａ・Ｂ・Ｃと郭群Ｄは別個に機能しており、特異な状況を示している。ただし、特徴的な登坂土塁が郭群Ａ及びＤで使用されており、地域的な特色と考えると、在来勢力の関与が想定できる。築城者は歴史的背景を考慮して、羽尾領を支配していた羽尾氏や、その上位権力となる斎藤氏の関与を想定したい。また、この城の画期となるのは、永禄７年の湯本氏の入部であり（表３－１）、あわせて武田氏による直轄下使用（表３－２・３）の開始をあげることができる。城機能が分離した背景には、上位権力と在地勢力との緊張関係を想定することができる。その意味で、武田氏に服属した湯本氏の自立的な立場も無視できない。湯本氏は羽尾領にとって外来者であり、武田氏によって所領を給付され、在城を許された立場と考えられる。したがって、この城を繋ぎの城として使う意図を持つ武田氏が、一部を湯本氏に委ねたとみることができる。このように考えると、城内の主要部を占める郭群Ａ・Ｂ・Ｃが武田氏勢力下で、郭群Ｄを湯本氏の支配とするのが妥当であろう。郭群Ａにおける技巧的に優れた縄張は、武田氏または真田氏の関与によって成立したという推論が成り立つ。なお、武田氏滅亡後、湯本氏は真田氏配下の有力者として成長しており、城全体を管轄下に置き、鎌原氏や河原氏の在城を取り仕切ったものと考えられる。

５　考察

（１）登坂土塁と改修の背景

この３城を比較対象として抽出した注目点は、登坂土塁の採用にあった。登坂土塁は尾根部の削り残しにより発生しており、実際は腰郭の構築方法により生じた結果とみなされる。登坂土塁の採用は、特別な技術を要するものではないが、築城技術として少数派に属するだろう。大戸手子丸城郭群Ａの腰郭と長野原城郭群Ａの腰郭の配置が近似してみえるのは、登坂土塁と半円形や三日月形の腰郭を左右対称状に組み合わせる縄張に起因している。こうした縄張を吾妻地域に根ざした地域色と捉えたい。程度の違いはあるが、岩下城郭群Ａも腰郭配置に共通性を見いだすことができる。しかも、それらの位置は全て主城部にあたる郭群に採用されていることから、築城時に意図された縄張に基づくものと推測する。大戸手子丸城と岩下城は、それぞれ在地勢力である浦野氏と斎藤氏が築城主体である可能性が高い。長野原城も羽尾氏との関係を想定することができる。拠点城郭であるため、築城が比較的早いと考えれば、築城技術として古様であったためと考えることもできる。

改修において、岩下城は相対的にその度合いが少ないとみられる。縄張の分析から、郭群Ｂに不整合を認める程度であった。具体的には、郭群Ｂで堀切と大竪堀が、改修によって付加されたと考えられる。これらの施設はごく一般的で特別なものではないが、郭群Ａではｂを除いて構築されておらず、城内では基本的には採用されていない築城技術であった。それゆえ、堀切も竪堀も特例とみなさざるをえない。これらは、比高差の少ない尾根筋とつながるこの城の弱点を補うために、改修により付加されたものとなるだろう。城史から永禄７年に武田氏による改修が想定されるが、同時期に武田氏による岩櫃城の取り立てが行われ、岩下城は時を待たずに廃城となったと考えられる。このため、改修される機会が少なかっただろう。比較的早く廃城を迎えた点から、城の最終形は武田氏の影響下にあったと考えられ、築城技術として時代的な限界も内包していよう。

大戸手子丸城は、改修の想定される部分をやや広範囲で認めるが、目的はシンプルである。登城路に対する対

応と最前線の防御力強化のため、遮断系施設を基本とする工夫を施したと考えられる。この城も主城部にあたる郭群Ａは、登坂土塁を多用し、遮断系施設の少ない縄張となっている。しかし、郭群Ａの尾根中腹(図７のｂ)付近から堀切・竪堀が顕著に施され、様相が異なっている。これは最前線を意識した防御施設の付加である。

一方、登城路の場合、技巧的に優れた工夫が加わることとなる。郭群Ｂ・Ｃでは、虎口と竪堀を連携させ、通路の横に武者溜まりを設けている。特に二重竪堀を虎口に使用した例は、長野原城の大手虎口(図11①)のほかこの地域では見られない仕様となる。ただし、この城では虎口空間と結びつけていない点で、築城技術として特に優れたものと見なしにくい。

大手道では、当初登坂土塁であったとみられる尾根(図８のａ４)を３条の堀切で遮断し、大手道を頭上から監視する工夫がなされている。技巧的に優れた築城技術を導入することで、防御力の強化を図ったとみなされる。この改修はパーツを付加するのではなく、登城路の付け替えや郭との関係変更など、縄張の根本的な見直しを伴った。したがって、導入した技術の優劣にかかわらず、大がかりな改修となる。この改修は、在来勢力によるものと想定しにくい。改修の契機は、登城路等の導入系の縄張に技術的なこだわりを持つ集団による根本的な改修と考えられる。城史から武田氏や北条氏による改修が想定されるが、段階的に実施された可能性もある。高度な築城技術導入の指標として、馬出や枡形の採用を見据えた場合、大戸手子丸城はそのレベルに達していない。

ところで、この城は北条氏直轄に関わる真田氏との境目の城と位置づけられ、北条氏が築城技術の粋を施すと想定される。しかし、同様に位置づけられる松井田城と馬出や畝状竪堀の在り方に比べて、全く様相を異にしている。これは、技術の問題でなく、選択の問題と考える。北条氏がこの城に対して選択した最終段階の築城技術は、敢えて最高レベルを求めるものではなかったのだろう。一括りに戦国大名系城郭とした場合でも、技術的なバラツキがある。これにより形式分類による進化論的な縄張検討が、一様に時間軸として使用できないことを意味していよう。ただし、上野国は戦国大名にとって他国であり、本国との地域的偏差を生じるはずである。このため、上野国に対する地理的要件が作用している。戦国大名系城郭の築城技術は、そのまま政治的な状況へ反映しない複雑さを創出するのである。

長野原城でみられる改修の状況は、やや複雑である。改修が施されたと考えられるのは、郭群Aにほぼ限定される。一つは大手口の防御力強化である。大手虎口に二重竪堀を設け、進路は正面の壁面にぶつかり左へ曲がり、頭上から監視を受ける。その後進路は空間ｆ(図11)に達し、側面を大土塁から監視される。大土塁の虎口を入ると枡形ｇを通過する。大手口に使用されている築城技術は卓越していて、大改修を伴っている。

改修のもう一つは竪堀の付加によるものだが、投下した労働力に比べて効果の大きいものである。腰郭群のほぼ中央部に竪堀を入れることで、一筋の出撃路を構築している。その際、既存の登坂土塁を一部削平したものと推測する。郭群Ａは、元来登坂土塁と腰郭群で城域最大の郭面積を有する主城部となっていたと考えられる。しかし、出撃路となる竪堀を設けることで、郭群Ａ全体が攻撃面に特化した縄張に造り替えられたと評価できる。これにより、郭群Ｂが主城部へ切り替わったとみなされる。この改修は単純に竪堀を付加しただけでなく、郭群Ａ全体の機能を変更してしまう決定力を有していた。築城技術の問題でなく、城の全体像の変更を意図したものであったとみなされる。大手口の高度な築城技術と、攻撃路の導入を一まとまりの改修と考えると、外来勢力による城の位置づけと築城技術の変更なくして説明は難しい。つまり、戦国大名による関与であり、城史から考えて武田氏や真田氏の関与を想定せざるを得ないだろう。

ただし、更に重要と思われるのは、改修の動機ではないだろうか。大手口の強化に最高レベルの技術を注ぎ、防御を固めること。郭群Ａに駐留する軍勢が一気に出撃を図れる周到な臨戦態勢を図ること。更には防御に優れた郭群Ｂとの連携。これらはなぜ施工されなければならなかったのか。城の価値付けに係わってくる。関与した戦力が自身の威信を示すために、高レベルの普請を施したのか。外敵に対する脅威が迫っており、必要に駆られた改修であったのか、可能性はいくつか想定できる。政治拠点としての価値を有していたかもしれない一方、史料上は確認できていないが、境目の城となるような地域情勢が一時的に発生していた可能性もある。

(２)改修技術の比較

図らずも、本稿で扱った３城はいずれも戦国大名によって改修が行われた事例と推測された。改修の程度は様々であり、一様に扱うことはできないが、戦国大名が縄張に関与した側面を捉えれば、戦国大名系城郭と定義づけることは可能であろう。同時に、築城技術の違いを手がかりに、戦国大名の関与を見分ける手法は難しいことを示すこととなる。戦国大名による築城技術の投下には選択の幅があり、時代差の指標とは直結しないと判断される。ただし、長野原城では高レベルの技術が投下されており、その技術を比較する手法は指標となる余地を残す。

作業内容を考えても、大きな違いが想定される。岩下城の改修は、堀切や竪堀の付加と考えられる。この場合、構築する場所が確定すれば、施工上あまり精度の高い技術は必要ないだろう。小山田信有の指示で行ったと考え

図12　仙蔵城連続竪堀群（１：2000）

た場合、短期間で作業し、次の大前城へと移動していく状況に合致する。小山田氏の技術力は不明だが、城を実見し縄張の弱点を見いだし、補強案を示す程度のものであったと推測する。施工者の専門性は必要なく、簡易な設計で行えたと考える。

大戸城の登城路改修は、単純なものではない。改修前の状況をある程度の測量によって把握し設計しなければ、目的どおりの結果を得ることはできないだろう。ただし、施工上高い精度が必要とは考えにくい。基本設計ができていれば、現場あわせで完成できる程度である。適度な測量技術で構築できるものと考える。

長野原城の大手口周辺の改修はそうはいかないだろう。基本設計段階から精度の高い計画が必要であり、現地に即した実施設計を行い、目的どおりに仕上げる技術力を必要とする。専門知識を持った技術者が必要となる。もちろん、築城段階も専門技術者が施工していたと考えられるが、改修段階の技術は当初の技術レベルを越えていよう。地域全体でみられる築城技術に比べて、別次元に高度な築城技術が導入されたとみなされる。構成要素として枡形の導入を伴う技術革新と位置づけられる。関与した勢力は、武田氏または真田氏を想定するが、導入技術がいわゆる戦国大名特有のお家芸に属するものか否か判断は難しい。

また、大戸手子丸城を含めて、連続竪堀の採用も特例的な要素である。その発展形に放射状竪堀群を見通すことができ、この連続竪堀も戦国大名系城郭の一類型に加えることができよう。吾妻地域で放射状竪堀群を使用した城として、仙蔵城（図12）がある。この城は永禄８年（1565）の嵩山合戦に関わって、武田氏が利用した城と考えられる（飯森2022）。廃城の時期は不明だが、永禄８年以降の改修は想定しにくい。戦国大名系城郭の一例として参考となる。

おわりに

本稿では、古様な築城技術として登坂土塁を位置付け、縄張分析から３城についてそれぞれの改修を検討した。改修には程度の違いがあり、戦国大名が関わったと考えられるケースであっても、必要によって投下される労働に質の違いがあり、採用される築城技術にも違いがあるものと結論づけた。枡形虎口の導入を伴い高度な技術を投下して構築された長野原城の様相は、形式分類によって系統づける戦国大名系城郭の研究視点を見通すものとなる。一方、高度な技法をどのような状況で採用するかという選択幅の存在を示している。戦国大名本国との地域偏差もある。このため、築城技術の優劣によって、時代差を見ようとする方向性に問題を残す。上野地域で展開する築城技術を再整理する必要もあるだろう。

長野原城については、特に踏み込んだ検討を行った。これまで関係文献が少なく取り上げられることも少なかったが、縄張分析を行った成果により、拠点城郭と位置付け、あわせて高度な築城技術を伴う戦国大名系城郭であると結論づけた。これにより、従来活用できなかった文書史料を長野原城に引きつけることができた。また、郭群Ｄは独立性の高い城域であることから、湯本氏の立場を反映し、武田氏の番勢と物理的な距離を置いたものと考えた。

なお、本稿は平成30年度公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団職員自主研究指定研究「群馬県西部地域の城館の実態調査」の成果の一部である。

参考文献

『吾妻記』（新井信示編著1949『吾妻史料集録』上巻　吾妻文化倶楽部刊、群馬地域文化振興会2019復刊版）
飯森康広　2022「武田氏の吾妻谷支配と嵩山合戦」『戦国期上野の城・紛争と地域変容』岩田書院
『加沢記』（『沼田市史』資料編Ⅰ別冊　沼田市1995年）
『群馬県史』資料編７中世３編年史料２　群馬県1986年
斎藤慎一　2003「戦国大名城館論覚書」『戦国時代の考古学』小野正敏・萩原三雄編　高志書院
『上越市史』別編２上杉氏文書集二　上越市2014年
『戦国遺文』後北条氏編第一～補遺編　東京堂出版1989～2000年
『戦国遺文』武田氏編第一～第六巻　東京堂出版2002～2006年
『戦国遺文』真田氏編第一巻　東京堂出版2018
平山優　2006「小山田信有」『戦国人名辞典』吉川弘文館
丸島和洋校注　2017『本藩名士小伝　－真田昌幸・信之の家臣録－』高志書院
村田修三　1981「縄張」『日本城郭体系』別巻Ⅱ　城郭研究便覧　新人物往来社
村田修三　2018「虎口革命とその周縁」『城館史料学』代10号　城館史料学会
森田真一　2009「禅宗史料からみた東国の領主」『群馬県立歴史博物館紀要』第30号
山崎一　1978『群馬県古城塁址の研究』下巻　群馬県文化事業振興会